

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2018年7月12日
氏名	則竹賢人
指導教員名	山田和政
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ※いずれかにチェック
論文採択・掲載日	2018年1月17日
論文掲載雑誌名	理学療法科学, 33(3), 447-451, 2018.
巻・号・年	※印刷中の場合は雑誌名のみ記載
doi	https://doi.org/10.1589/rika.33.447
タイトル	回復期脳卒中者における歩行自立レベルの変化が Frailty Cycle Factor に与える影響
発表者名（全員記載）	則竹賢人, 山田和政 <small>※筆頭著者は一番前に記入し, 自分に下線</small>
要旨 (250字程度)	<p>〔目的〕回復期リハビリテーション病棟入院中の歩行自立レベルの変化がフレイルサイクル形成因子に及ぼす影響について検討した。〔対象と方法〕初発脳卒中者21名を対象に, 入院時と退院時の歩行自立レベルの変化の違いから3群に分類し, フレイルサイクル形成因子の指標となる項目を測定した。〔結果〕入院中に歩行が自立した群では, 栄養状態と筋肉量を除く因子で有意な改善を認めた。退院時まで歩行が自立に至らなかった群と入院時より歩行が自立していた群では, すべての因子で改善を認めなかった。〔結語〕3群ともフレイルサイクルからの脱却はできていなかった。各群で改善すべき因子は異なり, フレイルサイクルの脱却に向けた理学療法プログラムを群毎に立案し実施する必要がある。</p>

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	平成 30 年 5 月 31 日
氏名	玉木徹
指導教員名	久保金弥（指導補助教員 林 久恵）
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ※いずれかにチェック
論文採択・掲載日	H30 年 5 月 25 日
論文掲載雑誌名	Anatomical Science International
巻・号・年	※印刷中の場合は雑誌名のみ記載
doi	10.1007/s12565-018-0444-z
タイトル	Effects of streptozotocin-induced diabetes on leg muscle contractile properties and motor neuron morphology in rats
発表者名（全員記載）	玉木徹、村松憲、生友聖子、大城直美、林久恵、丹羽正利 ※筆頭著者は一番前に記入し、自分に下線
要旨 (250 字程度)	本研究では、糖尿病発症後 12 週、22 週の内側腓腹筋（fast-twitch）とヒラメ筋（slow-twitch）の収縮特性の変化および、運動ニューロンの形態学的変化を調べた。streptozotocin により糖尿病を発症させたラットを糖尿群、健常なラットを対照群とした。糖尿病発症 12 週間後に、内側腓腹筋で張力減少が生じ、ヒラメ筋は収縮弛緩時間の延長が生じた。しかし、22 週では両筋で筋張力の減少、収縮弛緩時間の延長が観察された。一方、糖尿病発症の 12 週間後にヒラメ筋運動ニューロンの減少が観察されたのに対し、内側腓腹筋運動ニューロンは 22 週で減少した。これらのデータは、実験的糖尿病によって内側腓腹筋とヒラメ筋、さらに運動ニューロンが異なる障害様式を示すことを明らかにしている。

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	平成 30 年 5 月 31 日
氏名	玉木徹
指導教員名	久保金弥（指導補助教員 林 久恵）
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	H27 年 5 月 21 日 ～ H27 年 5 月 24 日
学会等名称：	第 58 回日本糖尿病学会年次学術集会
学会等開催場所：	山口県 海峡メッセ下関
国名，都市名，会場名	
研究・講演タイトル：	糖尿病慢性期に生じる遅筋線維の障害
発表者名（全員記載）：	玉木徹、村松憲、石黒友康、林久恵、久保金弥 ※発表者は一番前に記入し，自分に下線
研究概要 (150 字程度)	1 型糖尿病ラットを用い、糖尿病の病期 12 週と 22 週で筋の収縮特性の変化を観察した。その結果、筋張力の減少と弛緩時間の延長が生じる病期が速筋と遅筋で異なることが明らかになった。
感想その他 アピール欄 (100 字程度)	フロアーから建設的な意見を頂き、今後研究を進めるにあたり、とても参考になった。
写真添付欄 2 枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	平成 30 年 2 月 26 日
氏名	備前 宏紀
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など）	
論文採択・掲載日：	平成 30 年 2 月 18 日
論文掲載雑誌名	日本認知症予防学会誌 7(2) : 13-19, 2018
巻・号・年	http://ninchishou.jp/index.php?id=52#type017_52_10
doi	
タイトル：	物忘れを主訴とした高齢者の軽度認知機能障害に関する神経心理学検査及び日常生活活動の特徴
発表者名（全員記載）：	備前宏紀, 竹田徳則, 木村大介, 山名知子
要旨 (250 字程度)	物忘れのある高齢者の主観的認知障害（SCI）と軽度認知障害（MCI）を判別可能な神経心理学検査及び IADL 項目を検討した。SCI 群（33 名）と MCI 群（41 名）に分け、年齢、教育年数、MMSE 及び FAB の下位項目、論理的記憶 II、老研式活動能力指標及び JST 版活動能力指標の下位項目、性別を比較し、2 群間で有意差を認めた項目を独立変数、SCI 群・MCI 群を従属変数とし、ステップワイズ法による判別分析を行った。その結果、MMSE の遅延再生、FAB の論理的記憶 II、JST 版の情報収集の 3 項目が、物忘れを主訴とする高齢者を MCI と判別可能な項目であることが示唆された。

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2018年1月10日
氏名	伊井公一
指導教員名	山田和政
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ※いずれかにチェック
論文採択・掲載日	2017年6月28日
論文掲載雑誌名	理学療法科学, 32(6), 763-767, 2017.
巻・号・年	※印刷中の場合は雑誌名のみ記載
doi	https://doi.org/10.1589/rika.32.763
タイトル	転倒低リスク高齢者における転倒要因と転倒予防に向けた一考察
発表者名（全員記載）	伊井公一, 山中健行, 鈴木一弘, 廣瀬健人, 神野佑輔, 山田和政 ※筆頭著者は一番前に記入し, 自分に下線
要旨 (250字程度)	<p>〔目的〕 TUG テストにて転倒リスクが低いと判断される高齢者の転倒要因を明らかにし, 転倒予防について検討した. 〔対象と方法〕 TUG テストが13.5秒以内の高齢女性29人を, 非転倒群と転倒群に分類した. 歩行課題と起立一歩行課題における定常歩行に至る歩数, 起立一歩行課題における起立動作時の前方重心移動速度, 身体運動機能, 転倒恐怖心を調査し, 2群間で比較した. 〔結果〕 非転倒群(19人)と比較して転倒群(10人)は, 起立一歩行課題で定常歩行に至る歩数が1歩多く, 前方重心移動速度は有意に遅く, また転倒恐怖心のみ有意に低かった. 〔結語〕 転倒経験のある転倒低リスク高齢者の転倒要因は転倒恐怖心であり, 転倒予防として動作方法の工夫もそのひとつの手段であると考えられた.</p>

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2017年9月12日
氏名	窪 優太
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など
論文採択・掲載日	平成29年8月20日
論文掲載雑誌名 巻・号・年	老年精神医学雑誌 28 (8) : 899-904, 2017.
doi	
タイトル	回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動.
発表者名（全員記載）	窪優太, 中澤遼一, 各務真菜, 加藤美樹, 中島大貴, 岡村英俊, 長谷川慧, 竹田徳則.
要旨 (250字程度)	認知症高齢者の抑うつ・アパシー改善に対する集団料理活動の効果を調査した。対象は回復期リハビリテーション病棟入院中の認知症高齢者とし、介入群14名、対照群13名に割付けた。介入群には1回40～50分、週2回計8回、5名程度での集団料理活動を実施した。その結果、介入群には介入期間中、抑うつの有意な改善が認められたが、持続効果は認められなかった。一方、アパシー、QOLには有意な改善は認められなかった。本研究の結果より、料理活動によって活動期間中、認知症の抑うつが改善することが確認された。

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2017年8月27日				
氏名	石橋雄介		指導教員名	山田和政	
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ※いずれかにチェック				
論文採択・掲載日	2017	年	3	月	23 日
論文掲載雑誌名	理学療法科学, 32 (4), 509-513, 2017.				
巻・号・年	※印刷中の場合は雑誌名のみ記載				
doi	https://doi.org/10.1589/rika.32.509				
タイトル	精神科病棟入院患者の現状と理学療法の効果				
発表者名（全員記載）	石橋雄介, 西田宋幹, 山田和政 ※筆頭著者は一番前に記入し, 自分に下線				
要旨 (250字程度)	<p>〔目的〕身体合併症を呈した精神科病棟入院患者を対象に, 生活機能と精神機能に対する理学療法 (PT) の有効性を検証した. 〔対象と方法〕身体合併症に対して PT を実施した精神科病棟入院患者を対象に, 理学療法開始時と終了時の Barthel Index スコアおよび Global Assessment of Functioning スコアをカルテより収集した. 〔結果〕両スコアとも PT 終了時で有意に高得点であった. 〔結語〕身体合併症を呈した精神科入院患者に対する PT は, 生活機能のみならず精神機能の改善も期待できることが示唆された.</p>				

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2017年8月21日
氏名	窪 優太
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容（ <input type="checkbox"/> 研究論文採択 <input checked="" type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など）	※いずれかにチェック
論文掲載日：	2017年7月20日
論文掲載雑誌名 巻・号・年	日本認知症ケア学会誌 16(2) : 484~497, 2017.
doi	
タイトル：	本邦における認知症のBPSDに対する非薬物療法の現状と課題
発表者名（全員記載）：	窪優太, 竹田徳則
要旨 (250字程度)	国内で実施された認知症の行動・心理症状（BPSD）に対する非薬物療法の効果について、2000年から2015年の期間に国内外の学術誌に掲載された原著論文を抽出してレビューした。その結果、分析対象文献は15件で、BPSDの改善報告は10件であった。そのうち具体的症状として、抑うつと妄想観念の改善報告が3件と2件が多かった。BPSDの改善は週1回30分以上の介入で効果が期待できる可能性が高かった。今後の課題として、BPSDの各症状に対してどのような介入方法が最も効果的であるのかを明らかにする必要性が示唆された。

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2017年4月27日
氏名	伊井公一
指導教員名	山田和政
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など ※いずれかにチェック
論文採択・掲載日	2016年11月9日
論文掲載雑誌名	理学療法科学, 32(2), 221-225, 2017.
巻・号・年	※印刷中の場合は雑誌名のみ記載
doi	https://doi.org/10.1589/rika.32.221
タイトル	起立－歩行課題における若年者と高齢者の比較
発表者名（全員記載）	伊井公一, 山中健行, 鈴木一弘, 神野祐輔, 山田和政 ※筆頭著者は一番前に記入し, 自分に下線
要旨 (250字程度)	<p>〔目的〕歩行課題と起立－歩行課題を行い, 定常歩行に至る歩数を高齢者と若年者で比較し, 過渡歩行時の特徴を調査した. 〔対象と方法〕女性高齢者19名, 健常若年女性10名とした. 両課題の最速歩行時の歩幅, 速度, 起立－歩行課題での前方重心移動速度, 運動機能評価を比較した. 〔結果〕歩行課題では差がなかったが, 起立－歩行課題では定常歩行に至る歩数は高齢者で1歩多かった. 起立－歩行課題での前方重心移動速度, 運動機能評価で高齢者が有意に低下していた. 〔結語〕起立－歩行課題で定常歩行に至る歩数に違いがみられた. 要因として前方移動速度の低下が影響し, その原因として加齢による運動機能の低下が影響を及ぼした可能性があると考え.</p>

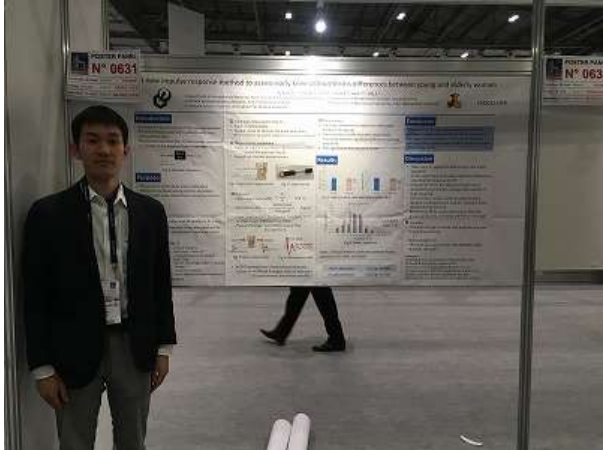

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2017年3月18日												
氏名	篠田光俊	指導教員名	安倍基幸先生										
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 <small>※いずれかにチェック</small>												
学会等開催日	29	年	3	月	16	日	～	29	年	3	月	20	日
学会等名称	日本脳卒中学会												
学会等開催場所	日本，大阪府，大阪国際会議場												
	<small>国名，都市名，会場名</small>												
研究・講演タイトル	脳卒中片麻痺患者の正中神経に対するエコー評価												
発表者名（全員記載）	篠田光俊，安倍基幸												
研究概要 （150字程度）	<p>慢性期脳卒中片麻痺患者での正中神経の形態学的な特徴を，エコーを用いて明らかにしました。</p> <p>対象を，健常，麻痺側，非麻痺側の3群に分けて検討しました．調査項目は，理学所見による正中神経障害の有無，エコー評価による正中神経の断面積と手関節運動に伴う長軸移動距離としました．非麻痺側は，経過と共に断面積が大きくなり，その増大により長軸移動距離の短縮を認めました。</p>												
感想その他 アピール欄 （100字程度）	<p>エコーは，臨床現場で用いられるようになってきています．本発表では，予防的観点から脳卒中患者の正中神経に対するエコー評価の重要性が提唱されおり，臨床的な意義の高い報告であると思います。</p>												
写真添付欄 2枚以内													

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2017年3月3日
氏名	則竹賢人
指導教員名	山田和政
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 <small>※いずれかにチェック</small>
学会等開催日	2017年2月23日～2017年2月24日
学会等名称	第32回日本静脈経腸栄養学会学術集会
学会等開催場所	岡山県，岡山シンフォニーホール
研究・講演タイトル	在宅脳卒中者の体組成と身体活動量からみたフレイル予防に向けた指導内容の検討
発表者名（全員記載）	則竹賢人，山田和政 <small>※発表者は一番前に記入し，自分に下線</small>
研究概要 (150字程度)	身体活動量とともに筋肉量もフレイルティ・サイクルの項目であり，在宅脳卒中者がフレイルに陥らないための指導が重要である．本研究は退院後の在宅脳卒中者3名の体組成と身体活動量の変化を明らかにし，適切な指導内容について検討した．
感想その他 アピール欄 (100字程度)	今後の研究を進めていくに当たり，参考となる情報を収集することができ，発表では質問の他，複数のアドバイスや意見を頂くことができた．
写真添付欄 2枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016.11.19
氏名	相本啓太
指導教員名	太田進
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	2016 年 6 月 8 日 ～ 2016 年 6 月 11 日
学会等名称：	European League Against Rheumatism (Eular)
学会等開催場所：	London, England
研究・講演タイトル：	A new impulse response method to assess early knee osteoarthritis differences between young and elderly women
発表者名（全員記載）：	Aimoto K, Itoh Y, Hase K, Sakai T, Kondo I, Ota S
研究概要 （150 字程度）	変形性膝関節症の早期診断のための予備的検討として、膝関節に対するインパルス応答法を実施した。変形性膝関節症基準に当てはまる地域高齢者では、健康若年者と比較して 20-30Hz において、パワースペクトルが大きい結果となった。変形性膝関節症者では関節軟骨等が変性し、衝撃吸収をしにくくなったことによる影響が考えられた。
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	ロンドンで開催された Eular に参加しました。リウマチを中心とした学会です。複数の方とディスカッションを行うことができ刺激になりました。非常に有意義な学会参加でした。
写真添付欄 2 枚以内	 

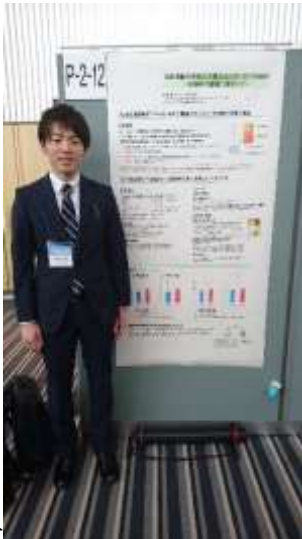
星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016.11.19
氏名	相本啓太
指導教員名	太田進
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	2016 年 5 月 27 日 ～ 2016 年 5 月 29 日
学会等名称：	第 51 回日本理学療法学会大会
学会等開催場所：	札幌市
<small>国名，都市名，会場名</small>	
研究・講演タイトル：	インパルス応答法を用いた膝関節振動計測方法の検討
発表者名（全員記載）：	相本啓太，太田進，近藤和泉
研究概要 (150 字程度)	変形性膝関節症の早期診断のための予備的検討として、膝関節に対するインパルス応答法の信頼性検討を実施した。出力部位は膝関節裂隙遠位 5、10、15cm において検討し、15cm 部位で級内相関係数が 0.9 以上と高い信頼性を示した。入力部位は、実施した膝関節内側顆と内側上顆とともに級内相関係数が 0.9 以上と高い信頼性であった。
感想その他 アピール欄 (100 字程度)	札幌で開催された第 51 回日本理学療法学会大会に参加しました。発表したセッションの座長から、「非常におもしろいアイデアで、今後に期待できる」と感想をいただきました。
写真添付欄 2 枚以内	写真はありません。

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年11月5日
氏名	渡邊良太
指導教員名	竹田徳則先生
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	2016年11月4日～2016年11月5日
学会等名称：	2nd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia Asian Aging Forum.
学会等開催場所：	日本，愛知県，今池ガスビル
国名，都市名，会場名	
研究・講演タイトル：	Potential for walking time and participation in sports groups to prevent frailty in community-dwelling older adults: The JAGES Project
発表者名（全員記載）：	<u>Ryota Watanabe</u> , Tokunori Takeda, Takahiro Hayashi, Satoru Kanamori, Taishi Tsuji, Katsunori Kondo.
研究概要 (150字程度)	フレイル発生予防につながる歩行時間とスポーツグループ参加による影響を明らかにすることを目的として，地域在住高齢者 29,286 名に 2 時点で自記式郵送調査を実施した。歩行習慣のある者においてもスポーツグループに参加することでフレイル発生リスクを低減できる可能性が示唆された。フレイル発生予防には単純に身体活動量を増加するだけでなく，他者との関わりが重要かもしれない。
感想その他 アピール欄 (100字程度)	日本開催ではありましたが初めての国際学会に参加しました。抄録やポスター作成，すべて英語でしたので大変でした。研究には英語は必須と考えますので勉強する良い機会となりました。
写真添付欄 2枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年10月30日
氏名	則竹賢人
指導教員名	山田和政
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	2016年10月22日～2016年10月23日
学会等名称：	第6回日本リハビリテーション栄養研究会学術集会
学会等開催場所：	富山県，富山国際会議場大手町フォーラム
国名，都市名，会場名	
研究・講演タイトル：	回復期脳卒中者の栄養管理のあり方における検討—安静時代謝量に着目して—
発表者名（全員記載）：	則竹賢人，山田和政 ※発表者は一番前に記入し，自分に下線
研究概要 （150字程度）	回復期脳卒中者の栄養管理において消費エネルギーのうち身体活動量とともに安静時代謝量（REE）の把握は重要であるが，入院中の推移は明らかではない．本研究では，回復期脳卒中者16名のREEの変化を明らかにし，理学療法士の視点から適切な栄養管理のあり方を再考した．
感想その他 アピール欄 （100字程度）	研究方法について参考となるアドバイスが頂け、有意義な学術集会であった．
写真添付欄 2枚以内	 <p>1枚</p>


星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年10月30日
氏名	伊井公一
指導教員名	山田和政
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	2016年10月22日～2016年10月23日
学会等名称：	第32回東海北陸理学療法学会大会
学会等開催場所：	岐阜県，長良川国際会議場
国名，都市名，会場名	
研究・講演タイトル：	転倒低リスク高齢者における「起立-歩行課題」からみた転倒予防策の検討
発表者名（全員記載）：	伊井公一，鈴木一弘，山中健行，神野佑輔，山田和政
	※発表者は一番前に記入し，自分に下線
研究概要 (150字程度)	転倒低リスク高齢者29名を転倒経験の有無により2群に分類し，「起立-歩行課題」と「歩行課題」における定常歩行に至るまでの歩数の違いから，その原因を調査し，転倒予防策について検討した。
感想その他 アピール欄 (100字程度)	今後，研究を進める上でフロアから多くの質問や貴重な意見を頂くことができた。学会大会長賞を受賞した。
写真添付欄 2枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2016年10月30日
氏名	藤井 稚也
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など）	
論文採択・掲載日	2016年10月15日
論文掲載雑誌名 巻・号・頁・年	作業療法 35（5）：562－570，2016.
doi	
タイトル	健康増進活動に参加する中高年者の運動の行動変容に関連する心理・社会的要因
発表者名（全員記載）	藤井稚也，竹田徳則
要旨 (250字程度)	本研究は，1年間の健康増進活動に参加した中高年者を対象に，活動期間中と活動終了3ヵ月後の縦断的視点から行動変容ステージ変化と，心理・社会的要因との関連を検討した．その結果，分析対象者18名のうち，活動期間中の行動変容「あり」群は10名，「なし」群は8名であった．行動変容ステージの前進や維持の関連要因として，多重比較の結果より活動前半の運動セルフ・エフィカシーの向上，群間比較より家族や友人からの肯定的なソーシャル・サポートの受領といった心理・社会的側面の影響が考えられた．

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年10月29日		
氏名	渡邊良太	指導教員名	竹田徳則
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他		
学会等開催日	2016年10月26日～2016年10月28日		
学会等名称	第75回日本公衆衛生学会総会		
学会等開催場所	日本，大阪府，グランフロント大阪 <small>国名，都市名，会場名</small>		
研究・講演タイトル	地域在住高齢者のフレイル発生と歩行時間との関連：JAGES パネルデータを用いて		
発表者名（全員記載）	渡邊良太，竹田徳則，林尊弘，金森悟，辻大士，近藤克則		
研究概要 （150字程度）	フレイル発生予防につながる歩行時間を年齢，身体状況別に明らかにすることを目的として，地域在住高齢者38,405名に2時点で自記式郵送調査を実施した．対象者全体におけるフレイル発生予防につながる歩行時間は一日の平均歩行時間が30分以上であった．一方，前期高齢者では歩行時間とフレイル発生とでは有意な関連はなく，後期高齢者では長いほど良好であった．		
感想その他 アピール欄 （100字程度）	全国公衆衛生学会に参加しました．この学会は非常に多くの職種が参加する学会です．リハビリ職種は少なめですが，理学療法士の方からも質問を受けました．報告内容をさらに深めて，論文化できるよう進めていきたいです．		
写真添付欄 2枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年9月25日
氏名	備前 宏紀
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 ※いずれかにチェック
学会等開催日	2016年9月23日～2015年9月25日
学会等名称	第6回日本認知症予防学会学術集会
学会等開催場所	宮城県仙台市
国名, 都市名, 会場名	東北大学百周年記念会館川内萩ホール, 東北大学川内北キャンパス
研究・講演タイトル	海馬の萎縮が手段的日常生活活動や認知機能に与える影響
発表者名 (全員記載)	備前宏紀, 竹田徳則, 山名知子, 木村大介
研究概要 (150字程度)	<p>アルツハイマー型認知症早期の特徴である海馬萎縮が手段的日常生活活動 (IADL) や認知機能にどう影響するか検討しました。その結果、海馬萎縮は認知機能にも関与しますが IADL を介し間接的に認知機能にも関与することが示唆されました。IADL の維持は認知機能の維持につながる可能性があり、認知機能低下を防ぐために、IADL に着目し介入することは重要であると考えられました。</p>
感想その他 アピール欄 (100字程度)	<p>認知症予防学会に参加してきました。私の発表に対し、様々な貴重な意見を頂き、今後の研究の参考となりました。色々な講演が企画され、現在の認知症、アルツハイマー型認知症における最新知見を学ぶことができ、意義深い学会参加となりました。</p>
写真添付欄 2枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年9月25日
氏名	備前 宏紀
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	2016年9月9日～2015年9月11日
学会等名称：	第50回日本作業療法学会
学会等開催場所：	北海道札幌市
国名，都市名，会場名	ロイトン札幌，ホテルさっぽろ芸文館，札幌市教育文化会館
研究・講演タイトル：	物忘れを主訴に受診した地域在住高齢者における脳萎縮や血流低下が神経心理学検査に及ぼす影響 Effect of the cerebral atrophy and the brain blood flow on the neuropsychological test in the elderly people with forgetfulness
発表者名（全員記載）：	備前宏紀，竹田徳則，山名知子，木村大介
研究概要 （150字程度）	アルツハイマー型認知症初期の特徴である海馬の萎縮や楔前部・後部帯状回・頭頂葉の血流低下が神経心理学検査にどのように影響を及ぼすかを検討することを目的に実施しました。その結果，アルツハイマー型認知症の危険性を早期に捉えるために，特に「日時の見当識」，「葛藤指示」に着目することが重要と示唆されました。
感想その他 アピール欄 （100字程度）	日本作業療法学会に参加してきました。私の発表に対し，様々な貴重な意見を頂き，今後の研究を進める上でとても参考となり，今回の学会発表の経験を活かし，良い研究が行えるよう努力していく所存であります。
写真添付欄 2枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年9月24日		
氏名	窪 優太	指導教員名	竹田 徳則
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 ※いずれかにチェック		
学会等開催日	2016年9月23日	～	2016年9月25日
学会等名称	第6回日本認知症予防学会学術集会		
学会等開催場所	宮城県仙台市		
国名, 都市名, 会場名	東北大学百周年記念会館川内萩ホール, 東北大学川内北キャンパス		
研究・講演タイトル	回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の持続効果の検討		
発表者名 (全員記載)	窪優太, 加藤美樹, 中島大貴, 岡村英俊, 中澤僚一, 長谷川慧, 各務真菜, 竹田徳則		
研究概要 (150字程度)	回復期リハ病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者の集団料理活動の持続効果の検討を目的とした。対象を介入群と対照群に分け、介入群には週2回計8回の料理活動を行った。その結果、抑うつ・アパシーには改善の持続は認められず、活動終了後のフォローアップの必要性が示唆された。		
感想その他 アピール欄 (100字程度)	もっと対象者数を増やし、詳細な分析をすることで、認知症に関わる方、認知症患者ご本人・ご家族の役に立てるようなデータを提供していきたいです。		
写真添付欄 2枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年6月5日
氏名	石橋雄介
指導教員名	山田和政
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他) ※いずれかにチェック
学会等開催日	2016年5月27日～2016年5月29日
学会等名称	第51回日本理学療法学会
学会等開催場所	北海道, 札幌コンベンションセンター
研究・講演タイトル	精神科病棟入院患者に対する理学療法が生活機能・精神機能に及ぼす影響に関する実態調査
発表者名 (全員記載)	石橋雄介, 山田和政, 林久恵, 西田宗幹 ※発表者は一番前に記入し, 自分に下線
研究概要 (150字程度)	精神科病棟入院患者の高齢化が進んでおり, 身体的リハビリテーションの必要性は高まっているが, 当該領域における理学療法 (PT) 研究は極めて少ない。本研究では, PT の対象となった精神科病棟入院患者 126 名の現状を明らかにするとともに, PT 実施者の生活機能及び精神機能の変化について調査した。
感想その他 アピール欄 (100字程度)	今後の研究に当たって多くの情報を集めることができ, また, 発表を通して貴重な意見やアドバイスをフロアおよび座長から頂くことができた。
写真添付欄 2枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年9月10日
氏名	窪 優太
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 ※いずれかにチェック
学会等開催日	2016年9月9日～2016年9月11日
学会等名称	第50回日本作業療法学会
学会等開催場所	北海道札幌市
国名, 都市名, 会場名	ロイトン札幌, ホテルさっぽろ芸文館, 札幌市教育文化会館
研究・講演タイトル	認知症のBPSDに対する非薬物療法の現状と課題
発表者名 (全員記載)	窪優太, 竹田徳則
研究概要 (150字程度)	認知症のBPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) に対する効果的な非薬物療法を実施するための示唆と課題を明らかにすることを目的とした。方法として国内で実施された非薬物療法の効果に関する国内外での報告を review した。その結果, 刺激に焦点を当てた週1回30分以上の音楽等を用いた介入によって, 抑うつや妄想観念が改善する傾向が示された。
感想その他 アピール欄 (100字程度)	近年, 認知症のBPSDへの対応は重要視されています。今回得られた示唆が, 臨床応用に役立てればうれしく思います。
写真添付欄 2枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2016年6月4日
氏名	窪 優太
指導教員名	竹田 徳則
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 ※いずれかにチェック
学会等開催日	2016年6月4日～2016年6月5日
学会等名称	第17回日本認知症ケア学会大会
学会等開催場所	兵庫県神戸市
国名, 都市名, 会場名	神戸国際展示場
研究・講演タイトル	抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の効果の検討 回復期リハビリテーション病棟における取り組み 第一報
発表者名 (全員記載)	窪優太, 加藤美樹, 中島大貴, 岡村英俊, 中澤僚一, 長谷川慧, 各務真菜, 竹田徳則
研究概要 (150字程度)	回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する, 集団料理活動の効果の検討を目的とした. 対象を入院時期で介入群と対照群に分け, 介入群には週2回計8回の料理活動を行った. その結果, 介入群には抑うつ・アパシー・QOLの改善が認められた.
感想その他 アピール欄 (100字程度)	今回の取り組みは多く聴衆の方に興味をもっていただけた様子でした. 回復期リハビリテーション病棟入院患者に対して, 精神機能面にも着目した介入を行う必要性を理解していただけるよう, 今後も取り組んでいきたいと思っています.
写真添付欄 2枚以内	